

金華山の鳥類相—補遺—

伊沢紘生*・藤田裕子**

Avi-fauna in Kinkazan Island, Miyagi Prefecture — Supplement —

Kosei IZAWA and Hiroko FUJITA

要旨：児童生徒への環境教育の一環として、多様性に富んだ自然の中での体験学習は欠かすことのできないものである。昨年は金華山における自然学習の対象動物として、野鳥の継続調査をまとめたが、その補足調査を本年実施した。その結果、島では37科123種、うち陸鳥110種、水鳥13種が観察されたことになる。

キーワード：野鳥、鳥類相、金華山、SNC構想、自然体験学習

1. はじめに

宮城教育大学環境教育実践研究センターのプロジェクト研究のひとつ、「金華山でのSNC構想の推進」の一環として、筆者らは島の鳥類相に関する調査を継続してきた。そして、昨年度(2001年)にひとまずのまとめを行った(伊沢・藤田, 2002)。その結果、島で確認された鳥類は34科114種、うち陸鳥102種、水鳥12種だった。

金華山(図1)の鳥類相の調査は以後も継続されているが、本年(2002年)12月までの調査で新たに9種(大西・西塚の記録を含める)が観察された。また、すでに確認されている種のうち、昨年のもまとめでは記載されていない季節に観察された鳥類が12種あった。それらを含め、ここでは、年によって島の鳥類相が変化する具体的な様相について、前回のまとめの補遺という形で追加報告する。

2. 新たに観察された種と異なる季節に観察された種

前回リストアップした鳥類以外に、今回筆者らが新たに確認した鳥類は、陸鳥ではミゾゴイ、ジュウイチ、ヒレンジャク、サメビタキ、ギンザンマシコの5種である。なお、ミゾゴイは前回のまとめのヤマシギ、ア

オシギと同じく陸地で主に観察される鳥なので陸鳥の中に含めた。観察日は5月4日で、二ノ御殿から東海岸へ下る遊歩道に沿った沢で、沢の中の平らな石の上に突っ立っていた。また、これまでとは異なる季節に観察された鳥類は陸鳥で10種だった。

以上を、前回まとめた表に書き加えたのが表1である。この表の種名の配列、季節区分、各種記号等はすべて前回のまとめに準じている。また、前回と同様、主に神社から鹿山にかけて生息するニホンジカを継続調

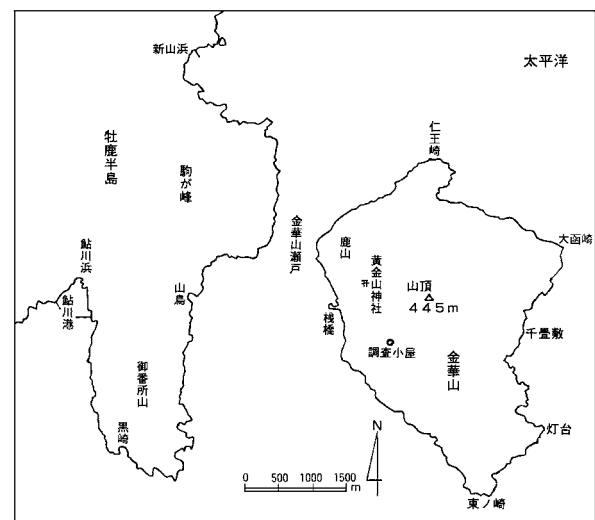


図1 調査した金華山の概略図

*宮城教育大学環境教育実践研究センター, **宮城教育大学教育部

表1 金華山の野鳥リスト (陸鳥)

鳥の種名 (和名)	季節				Iz	O・N
	春	夏	秋	冬		
サギ科						
ミゾゴイ	▲					
ワシタカ科						
ミサゴ	○		○	○		○
トビ	○	○	○	○		○
オジロワシ			○	○		○
オオワシ			○	○		○
オオタカ			▲	△		○
ツミ	△					△
ハイタカ	○					
ノスリ	○		○	○		○
サシバ	△					○
チュウヒ			△			
ハヤブサ科						
ハヤブサ	○	○	○	○		○
キジ科						
ヤマドリ	○	○	○	○		○
クイナ科						
クイナ						○
オオバン						▲
シギ科						
ヤマシギ			○	○		
アオシギ			○			
ハト科						
キジバト	○	○	○	○		○
アオバト		○				○
ドバト	○	○	○	○		○
ホトトギス科						
ジュウイチ	●					●
カッコウ	○	○				○
ツツドリ	○	○	●			○
ホトトギス	○	○				○
フクロウ科						
オオコノハズク					△	
フクロウ	○	○		○		○
ヨタカ科						
ヨタカ	○	○				○
アマツバメ科						
ヒメアマツバメ						△
アマツバメ			●			○
カワセミ科						
アカショウビン						△
カワセミ					△	
ヤツガシラ科						
ヤツガシラ						△
キツツキ科						
アオゲラ	○	○	○	○		○
アカゲラ	○	○	○	○		○
オオアカゲラ			○			
コゲラ	○	○	○	○		○
ヒバリ科						
ヒバリ						▲
ツバメ科						
ツバメ	○	○	○			○
イワツバメ	○	○				
セキレイ科						
キセキレイ			○			○
ハクセキレイ	○	○	○	○		○
セグロセキレイ	○		○			○
ビンズイ	▲	▲		△		△
タヒバリ			●			○
サンショウクイ科						
サンショウクイ	○	○	○			○
ヒヨドリ科						
ヒヨドリ	○	○	○	○		○
モズ科						
モズ	○		○	○		○
レンジャク科						
キレンジャク			○	●		○
ヒレンジャク				▲		
ミソサザイ科						
ミソサザイ	○		○	○		○
イワヒバリ科						
カヤクグリ						○
ヒタキ科						
コマドリ	○					△
ノゴマ			△			○
ルリビタキ			○	○		○
ジョウビタキ			○	○		○
イソヒヨドリ	○	○	○	○		○
マミジロ						△
トラツグミ	○	●	○	○		○
クロツグミ	●		○			○
アカハラ	○		○	○		○
シロハラ	○		○	○		○
マミチャジナイ			○			△
ツグミ	○		○	○		○
ヤブサメ	○	○	○			○
ウグイス	○	○	○	○		○
メボソムシクイ						○
コメボソムシクイ						▲
エゾムシクイ	●					○
センダイムシクイ	○	○				○
クイタダキ	○	○	○	○		○
キビタキ	○	○	○			○
オオルリ	○	○				○
サメビタキ				▲		
エゾビタキ	●		△			
コサメビタキ	○		○			○
サンコウチョウ	●	○	●			○
エナガ科						
エナガ	○	○	○	○		○
シジュウカラ科						
コガラ	○	○	○	○		○

(表1の続き)

鳥の種名 (和名)	季節				Iz	O・N
	春	夏	秋	冬		
シジュウカラ科						
ヒガラ	○	○	○	○		○
ヤマガラ	○	○	○	○		○
シジュウカラ	○	○	○	○		○
ゴジュウカラ科						
ゴジュウカラ	○			○		○
メジロ科						
メジロ	○	○	○	○		○
ホオジロ科						
ホオジロ	○	○	○	○		○
ホオアカ						△
カシラダカ	○		○	○		○
ミヤマホオジロ			○			○
ノジコ	○	○				○
アオジ	○	○	○	○		○
クロジ	○		○			○
アトリ科						
アトリ			○	○		○
カワラヒワ	○	○	○	○		○
マヒワ	●		○	○		○
ベニヒワ						
ベニヒワ						△
ハギマシコ						
ハギマシコ			○	○		○
ギンザンマシコ						
ギンザンマシコ	▲		▲			
イスカ						
イスカ		▲	○	○		△
ベニマシコ						
ベニマシコ						○
ウソ						
ウソ			○			○
コイカル						
コイカル						○
イカル						
イカル			○			○
シメ						
シメ	○			○		○
ハタオリドリ科						
スズメ						
スズメ	○	○	○	○		○
ムクドリ科						
コムクドリ						
コムクドリ	○					○
ムクドリ						
ムクドリ	○	○				○
カラス科						
カケス						
カケス	○		○	○		○
カササギ						
カササギ						△
ホシガラス						
ホシガラス			○	○		△
ハシボソガラス						
ハシボソガラス	○	○	○	○		○
ハシブトガラス						
ハシブトガラス	○	○	○	○		○

注) 上欄の季節区分や記号のIz, O・Nについては伊沢・藤田(2002)を参照のこと。
 白抜きの○と△は昨年度までの記録(△は1~2回しか観察されなかったもの)。
 黒塗りの●と▲は今年の記録(▲は1~2回しか観察されなかったもの)で、
 新たに観察された種と異なる季節に観察された種を示す。
 ⊙は昨年までのまとめでは△であったのが、今年の観察で○になったものを示す。

査中の大西信正と西塚大幸(星野リゾート・ピッキオ)が2002年5月15日から7月1日および10月9日から11月18日の期間に新たに観察した鳥類を、両研究者の好意で表1に加えさせてもらった。筆者らは確認できず彼らが新たに観察した鳥類はオオバン、ヒバリ、コメボソムシクイの3種で、オオバンは海上ではなく内陸部の湖や池などで観察される鳥なので、ここでは陸鳥として扱った。そのオオバンは、10月19日に神社のすぐ北にあるシキミ林の中でカラスに襲われていた。

水鳥については、ウミアイサが2月23日に磯の波打際ごく近くで観察された。場所は東海岸の千畳敷で、番いが長いこと採食行動をしていた。ウミアイサはこれまで洋上でしか観察されておらず、筆者らが島の鳥としてリストアップする鳥類の基準、すなわち、“島にいて双眼鏡での観察が十分可能な鳥”にはあたらなかったもので、前回の水鳥のまとめでは省いてある。なお、ウミアイサは黒田・小笠原(1967)のリストにはなく、竹丸(1973)と田中(1982)の報告には記載されている。また、イソシギは8月23日に、今まで観

察された磯辺ではなく、島を南北に走る稜線の山頂より南にあるコル、二ノ御殿(二ノ峠)のすぐ東側の尾根上で観察された。これらを前回まとめた表に書き加えたのが表2である。表1と同様、この表の種名の配列等すべては前回のまとめに準じている。

以上から、島で確認された鳥類の合計は、大西・西塚の観察記録を含め、37科123種、うち陸鳥110種、水鳥13種になる。

このように、たかだか10平方キロメートル前後の小さい島でたくさんの野鳥が記録できたのは、金華山が鳥たちの渡りのルート上にあつて、かつ、多くの鳥たちにとって中継地という意味をもっているからなのかもしれない。もしそうだとしたら、昔から地元漁師が船と陸地との距離を計る目印になるほどの高さ(海拔445メートル)があり、霊山としての長い歴史を通して人工物のほとんどない緑濃い島であり続けたことによるのだろう。

表2 金華山の野鳥リスト (水鳥)

鳥の種名 (和名)	季節				Iz	O・N
	春	夏	秋	冬		
ウ科						
ウミウ	○	○	○	○		○
ヒメウ	○			○		
ガンカモ科						
カルガモ	○					
シノリガモ				○		△
ウミアイサ				▲		
シギ科						
キアシシギ			○			▲
イソシギ	○	▲				
カモメ科						
ユリカモメ	△					
セグロカモメ			○	○		○
オオセグロカモメ	○	○	○	○		○
シロカモメ		●	○	○		
カモメ			○	○		
ウミネコ	○	○	○	○		○

注)表中の記号はすべて表1に準ずる。

3. 年による島の鳥類相の変化

表1と表2にまとめた鳥類リストは、言うまでもなく筆者らが調査を開始して以来2002年12月までの観察結果を積算したものであり、これらの鳥がいずれかの季節に必ず島で見られるというわけではけっしてない。すなわち、いずれの野鳥も、ある年には島でごく普通に見られるのに、別の年にはほとんど観察されないといったこともよくある。そして、それがどうい原因によるのか、簡単には突き止められない場合が実際には多い。しかし、ある事が生じたために、その年だけ頻繁に見られたり、逆に全くといっていいほど見られなかったということもある。以下に、ごく最近に起こった出来事と野鳥との関係が明らかな具体例を三つ紹介する。

1) カタクチイワシの大群の南下

2001年11月22日の夜明け前に雄勝町熊沢を通過したカタクチイワシの大群は(河北新報11月28日朝刊、朝日新聞11月29日朝刊)、22日午後から23日夕方にかけて、金華山の東海岸沿いに北から南へと移動していった。その際、大量のイワシが磯に打ち上げられたり、タイドプールに閉じ込められたりした。それらのイワシには、島にいつもいるハシブトガラス、ハシボソガラス、ウミネコ、オオセグロカモメなどが群がったが、おそらくイワシの群

れについて南下してきたと思われるオオワシとオジロワシがこの両日のみ、島で目撃された。また、磯近くの海面には、ウミネコ、オオセグロカモメに混ざって、セグロカモメ、カモメ、シロカモメの大群がこの両日に滞留しているのも観察された。これらカモメたちが浮かぶその先の海面には、ウミスズメの仲間が大群を作って浮んでいたが、双眼鏡では遠すぎて、種の同定はできていない。そして、翌24日には、イワシの大群が去り、オオワシやオジロワシも、カモメ類もウミスズメの仲間も、島とその周囲から全く姿を消した。

2) 落葉樹の実の不作

2001年の秋は、金華山の落葉樹で優勢な樹種、ブナ、シデ類(イヌシデとアカシデ)、ケヤキが全くの不作であり、ナラ類(コナラとミズナラ)やカエデ類(オオモミジ、ヤマモミジ、タカオカエデ、ウリハダカエデ、イタヤカエデ等)もおしなべて不作であった。

そのため、これら落葉樹の落果(実際には種子)を求めて例年なら沢山飛来し、島のいたるところで見かけるツグミが、その秋は一日中島を歩いて1回、1~2羽を見かければ良い方といった状態だった。そして、この状態は春先までずっと続いた。同様にキジバトも希だったし、例年なら100羽を越す大群でやって来るマヒワやカワラヒワ、ハギマシコなども、そのような大群が一度も目撃されなかった。

神社の建物をねぐらにして行動しているドバトの7~8羽の群れも、この時期ほとんど見かけず、いつもならハヤブサの捕食によるドバトの羽根の散乱があちこちで発見されるのだが、それもほんの数ヶ所だった。そのかわりと思われるがカラスの羽根の散乱が島で初めて、2ヶ所で観察された。

一方で、ヤマボウシ、クマノミズキ、ガマズミ、ノイバラなどの実は、主にサルによって10月中にはほとんど食べ尽くされ、それらを秋から初冬にかけて採食する、島ではごくなじみのヒヨドリが極端に少なかったし、カケスの姿を目撃することは一度もなかった。

3) マツクイムシによるマツの立ち枯れ

マツクイムシの被害は1980年代から島で顕著に

見られるようになったが、2000年には島の南側の海岸松林のマツが大量に枯れ、それが2001年には千畳敷を越えて北の仁王崎まで拡大した。その年は、実(マツボックリ)をつけたあとに枯れたマツの木が東海岸で目立ち、そのマツボックリから種子をつつき出して食べるホシガラス3羽を、筆者らは10月26日に初めて目撃した。ホシガラスはその後2002年1月までずっと、東海岸に沿った松林で、最高1度に5羽までが観察され続けた。

そのホシガラスは2002年2月以降は姿を見なくなり、2002年の秋から冬にかけても、結局1羽も観察できなかった。おそらくホシガラスにとって、2001年秋から冬にかけての金華山は、マツの種子が食べ放題という特異な状態にあったからではないかと思われる。

ホシガラスと共に、2001年秋から冬にかけては、東海岸沿いの松林で、アカゲラがこれまでにない沢山見られた。海岸松林ではめったに見かけないアオゲラも数が多かった。アカゲラやアオゲラはいずれも立ち枯れしたマツの木をつついていたので、その秋、両種の好む虫が立ち枯れしたマツに沢山巣食っていたものと思われる。3月に入ってから、その地域で両者をほとんど見かけなくなった。同様の期間にカラ類(シジュウカラ、ヤマガラ、ヒガラ、コガラ、エナガ)やコゲラも、この松林に非常に多かった。

以上の具体例からもわかるように、こと金華山にかぎらず、野生動物を自然学習の教材として活用するにあたっては、対象とした動物の継続調査がいかに重要であるかが理解されよう。

(ノート)

昨年度(2001年度)に刊行された環境教育研究紀要・第4巻に掲載の「金華山の鳥類相」で、引用した文献の著者名に誤りがあった。お詫びして訂正させていただく。

(誤) 松本勝彦 → (正) 松木勝彦

(誤) 立花信繁 → (正) 立花繁信

謝 辞

本報告をまとめるにあたって星野リゾート・ピッキオの研究員大西信正氏と西塚大幸氏からは貴重な資料の提供を、宮城教育大学環境教育実践研究センターの溝田浩二氏からは適切な助言を、宮城北部森林管理署石巻事務所からは金華山造林宿舎の使用許可を受けた。心からなる感謝の意を表する次第である。

引用文献

- 伊沢紘生・藤田裕子, 2002. 金華山の鳥類相. 宮城教育大学環境教育研究紀要, 4: 1-8.
- 黒田長久・小笠原暁, 1967. 1996年宮城県金華山島で行った鳥類調査目録. 昭和41年度文部省科学研究費特定研究・各種陸上生態系における二次生産構造の比較研究(加藤陸奥雄編): p. 180-183.
- 竹丸勝朗, 1973. 金華山の鳥類. 南三陸海岸自然公園学術調査報告: p. 45-46.
- 田中完一, 1982. 野鳥は空に花は野に—南三陸野鳥観察—. 志津川愛鳥会, 407pp.

